

氏名	木村能成
氏名	KIMURA, Yoshinari
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第233号
学位授与年月日	2022年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Significance of Group Therapy on Affect Regulation in Children and Adolescents –Possibility of the Mentalizing Approach– 児童・思春期の感情調整におけるグループセラピーの意義 –メンタライジング・アプローチの可能性–
論文審査委員	主査 上級准教授 西村馨 副査 教授 森島泰則 副査 上級准教授 直井望

論文内容の要旨

感情調整 (affect regulation) の課題を抱え、対人関係で不適応を起こす子どもの理解と対応は、心理臨床の大きな問題である。本研究は、そのような児童・思春期の子どもに対してメンタライジング・アプローチの観点からグループセラピーを実践し、その意義を検討したものである。

感情調整とは、不快な感情の経験を最小限にするために、自分の気分の状態をコントロールして安全に抱える能力を指す。それは、養育者が子どもの心理状態を理解することで、子どもの安定した愛着を形成し、それによって子どもが自他の心理状態を理解する能力が育まれるという循環関係の中で育まれる。この心理状態を理解、推測する能力が「メンタライジング」 (mentalizing) である。Allen, Fonagy & Bateman (2008) は、メンタライジングの理論に基づいてクライアントを理解し、サポートする心理療法をメンタライジング・アプローチと総称し、さまざまな手法が発展してきている。

本研究が取り扱ったのは、児童・思春期へのグループセラピーである。今日的な感情調整の課題を抱える子どもたちに対してグループセラピーは有効だと予想されるが、その手法の整備、効果を生むメカニズムの検討、データの蓄積が現時点での課題である。

そこで、子どものグループセラピーによって感情調整の改善がどうなされるのかをメンタライジング・アプローチの観点から描き出すことを目指し、事例研究がなされた。

研究1では、定型発達の児童期男子Aとの長期の関りの考察。Aは学校適応や学業に問題は無いが、仲間関係は乏しかった。当初、他メンバーと関わらない、良い子だったAは、次第に他児に攻撃的な言動を見せ始めた。セラピストは、発言を禁じるのではなく、むしろ、その発言にある意図や感情を明確にしようと関わった。やがてAはセラピストへの甘えを見せつつ、他児に自分の欲求や意図を言語化したり、競争や協力ができるようになった。このように、メンタライジング関係が継続することで、子どもは関係の中で自己を表現しながら感情調整していくことが示された。

研究2では、仲間関係の中での感情調整の改善過程を抽出しようとした。対象とした児童期男児Bには愛着の課題があり、Cには発達障害傾向があり、両者ともその課題に由来する感情調整の問題があった。参加当初、グループで落ち着いて活動に取り組むことが難しかったが、セラピストたちは彼らを落ち着かせ、2人の間で生じるトラブルに対し、状況を整理し、言い分を聞いていくことで、落ち着く体験を繰り返した。やがて、トラブルが起こっても、仲間同士で情緒を落ち着かせ調整できるようになり、さらにその後、2人はお互いの気持ちを理解し合って、感情調整に改善が見られた。仲間同士でのメンタライジングによる感情調節が可能であることが示された。

研究3では、トラウマ体験を有し、感情調整に問題を抱える思春期ケースを検討した。中学生男子Gはいじめを受け、不登校になり、希死念慮を持っていた。当初、Gは一方的に話し、他児との相互作用が難しかった。遊びをリードするばかりで、自身のネガティブな気持ちを表現しなかったGだったが、その後参加した同級メンバーJが希死念慮を語ると、Gも向き合うようになり、お互いの体験を語り合い、理解し合うようになった。この間、セラピストは一貫してGのメンタライジングを試みていたが、苦痛な体験がナラティブになるにつれて、Gの感情調整はJとともに安定していった過程が抽出された。

第6章で研究3の逐語データの詳細な分析が行われ、「アセスメント」「介入」「感情調整の変化」の観点から、変化をより具体的に確認し、介入の有効性が考察された。

これらを踏まえ、総合考察において、メンタライジング・アプローチを用いた児童・思春期グループセラピーのモデルが提示された。セラピストは、活動を通じた「楽しみ」の雰囲気や土台に、子どもの自由な感情表出を助ける。だが、不安や緊張が喚起され、非メンタライジングモードが優勢になる時がある。その際に、子どもの感情を調整し、メンタライズする。こうしたやり取りの繰り返しにより、次第にメンバー同士でメンタライズしたり、感情を調整したりするようになるのである。

最後に、このモデルの再現可能性を検討し、今後の応用可能性、とりわけ学校教育現場での可能性と期待が論じられた。

論文審査結果の要旨

木村能成氏の博士學位論文最終審査は2022年1月26日午後4時30分からZoomミーティングにて行われた。始めに、木村氏からの発表が30分間行われ、続いて参加者と審査委員との質疑応答が30分行われ、最後に審査委員と木村氏との口頭試問が30分行われた。続く審査委員会において、委員は本論文が、国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科における博士（学術）を授与するに値するものと認めた。

現代における子どもの発達、適応、メンタルヘルスの問題については、ますます深刻の度を増している。とりわけ、親子間の愛着関係の脆弱さに起因する仲間関係形成の課題が、子どもの学校適応を始めとする社会適応を難しくしてしまっている。その結果、本来成長の幅を広げる機会を提供するグループ体験が脅威を与えるものとなってしまい、ひきこもりを生じることになってしまう。これに対する心理臨床的（あるいは、精神医療的、社会福祉的、教育的）な対応として、最初は個別の対処が選ばれるが、徐々にグループワークが併用され、発達の促進が図られることになる。実際、デイケア、適応指導教室などのグループが実践されているのだが、その成長（発達）促進的、治療的メカニズムについては、体系化された原理が共有されているというわけではない。実は、それを最も体系化して技法として洗練させたものが児童期から青年期にかけてのグループセラピーである。そして実は、ICUの臨床心理学プログラムは、アメリカの思春期・青年期グループセラピーの大家Dr. Saul Scheidlingerとのつながりがあり、90年代から多様なグループが実践され、大学院臨床心理学プログラムが展開した時期には活発なプロジェクトが展開され、国内的、国際的に先駆的な研究内容が行われていた。木村氏は、そのようなICU臨床心理学のグループ専門家養成の歴史において最後の学生となる。

木村氏が本研究で取り扱ったグループは自らセラピストとして関与し、運営してきたものであり、研究や実践を通して、グループとともに、子どもたちと共に育ったと言っ
てよい。彼自身の専門家としての成長の途上で行った研究発表は少なくなく、実践報告として執筆されたものもそれなりにある。本研究は、そのような流れにあって、とりわけ、近年大きな課題となっている子どもの感情調整に的を絞り、とりわけ有益だと考えられるメンタライジングの理論と手法を用いて接近しようとしたものである。

メンタライジング・アプローチは、愛着関係におけるその瞬間瞬間の情緒交流のエッセンスに注意を向けるものであり、それを実践する者にとっては子どもとの関わりを一層生々しく感じさせるものであり、それを研究としてまとめるに際しては、事例研究という形態をとることが自然である。本研究において、木村氏が提示した研究1、研究2、

研究3は、そのアプローチを1年から数年にわたって続けた結果生じた変化をまとめたものである。それは、事例的、資料的価値や新規性を備えた、貴重な研究であると言える。一方、どのような変化が、そのアプローチによってもたらされたと言えるのかという疑問に十分こたえられないという弱みも抱えることになってしまう。そこで研究3のデータについて、変数を絞り、詳細に分析することで、手法が変化に与えた影響を可能な限り明確な形でとらえようとした。感情調整の課題のアセスメントと介入の例、そして感情調整の変化を明確に提示したことで、その影響関係はかなり明確になったと言える。セラピストの側からの積極的で粘り強いメンタライジングによって、子どもは当初自分一人で扱えなかった情動に触れることができるようになってくる。それによって、感情調整の仕方がより適応的なものになってくるのである。

児童・思春期の子どもたちが示す心理的問題に関して養育者、教育者、支援者が困るのは、彼らが自分の直面している困難な事態を言葉などの手段で伝えきれず、破壊的な方法で表現することである。それにより、大人たちは彼らの起こす問題行動に振り回されることになるのだが、その事態の解決のためには、彼らの行動の背後にある心理状態に注意を向ける必要がある。それによって、子どもは、自分も周囲も追いつめてしまっていた問題に新たな糸口を見つけ出すことができる。そして、仲間同士のコミュニケーションを真正な自己に基づいた、深いものにすることができる。この発見は、いわゆる問題行動・病的行動を呈する子どもへの「臨床」現場だけでなく、広く子どもが育つ場、そして家族へと広がっていくことで、現代的問題への一つの解決法となるのではないかと期待される。そのような意味で、木村氏の研究を評価するとともに、氏の研究面、実践面での今後一層の活躍が期待される。

Summary of Doctoral Dissertation

Understanding and dealing with children who have problems with affect regulation and maladjustment in their relationships with others is a major issue in psychotherapy and counseling. The present study examines the significance of group therapy for such children and adolescents from the perspective of mentalizing approach.

Emotion regulation refers to the ability to control and safely hold one's mood state in order to minimize the impact of unpleasant emotions. It is fostered in a cyclical relationship in which the caregiver understands the child's psychological state, thereby forming a secure attachment to the child, which in turn fosters the child's ability to understand the psychological states of himself and others. Allen, Fonagy & Bateman (2008) refer to psychotherapy that understands and supports clients based on the theory of mentalizing as mentalizing approach. A variety of methods have been developed.

The present study deals with group therapy for children and adolescents. It is expected that group therapy will be effective for children with affect regulation issues, but the current issues are the development of methods, the examination of mechanisms that produce effects, and the accumulation of data. Therefore, case studies were conducted with the aim of depicting how children's emotional regulation is improved by group therapy from the perspective of mentalizing approach.

Study 1 examined the long-term change process of a neurotypical boy A in middle childhood. A had no problems with school adjustment or academics, but his peer relationships were poor. Initially, A showed a good and polite attitude but did not get involved with other members. Gradually he began to show aggressive behaviors toward other children. The therapist did not prohibit him from acting out, but rather tried to clarify the intentions and feelings behind his words. Eventually, A became able to verbalize his needs and intentions to other children, compete and cooperate, while showing intimate attitudes to the therapist. In this way, the continuation of this mentalizing relationship showed that the child was able to express himself in the relationship and regulate their emotions.

In Study 2, the process of improvement of affect regulation in peer relationships was extracted. The target boy, B, had attachment issues, and C had developmental disability tendencies, and both of them had problems with affect regulation derived from these issues. At the beginning of their participation, it was difficult for them to work calmly in the group, but the therapists calmed them down and

repeatedly gave them calming experiences by sorting out the situation and listening to their arguments in response to the troubles that arose between them. Eventually, they were able to calm and regulate their emotions in the company, and later, they were able to recognize each other's feelings and their affect regulation improved. This shows that mentalizing can take place between peers for affect regulation.

In Study 3, an adolescent case with traumatic experiences and problems in affect regulation was examined. A male junior high school student, G, was bullied, stopped attending school, and had suicidal ideations. Initially, G spoke in a one-sided manner and had difficulty interacting with other members. G also tended to monopolize the group by leading plays and activities. However, when J the same age as G participated in the group, talked about her own suicidal thoughts, G began to face his own feelings, and they began to talk and understand each other's experiences. During this time, the therapist consistently attempted to mentalize G. As the painful experience took shape as a narrative, a process was identified in which G's affect regulation got stabilized along with J's process.

A further, detailed analysis of the verbatim data of Study 3 was conducted in Chapter 6, and the effectiveness of the intervention was discussed by confirming the changes more concretely in terms of "assessment," "intervention," and "changes in affect regulation.

Based on the above, a model of child and adolescent group therapy using the mentalizing approach was presented in the general discussion. The therapist helps the child to express his/her feelings freely based on the atmosphere of "fun" through the activities. However, there are times when anxiety and tension are aroused and some non-mentalizing mode prevails. When this happens, therapist adjusts the child's emotions and mentalize them. Through the repetition of these interactions, the members gradually come to mentalize and regulate each other's emotions.

Finally, the reproducibility of this model was examined, and the possibilities and expectations for future applications, especially in the field of school education, were discussed.

Summary of the Dissertation Evaluation

The final examination of Mr. Yoshinari Kimura's doctoral dissertation was held on January 26, 2022, at 4:30 p.m. in a zoom meeting. First, Mr. Kimura gave a 30-minute

presentation, followed by a 30-minute question-and-answer session, and finally a 30-minute oral examination between the committee members and Mr. Kimura. The committee members found this dissertation to be worthy of the award of Ph. D. at the Graduate School of Arts and Sciences, International Christian University.

The developmental, adaptive, and mental health problems of children today are becoming more and more serious. In particular, problems in forming peer relationships due to weak attachment relationships with parents make it difficult for children to adapt to school and other social situations. As a result, group experiences, which are supposed to provide opportunities to expand one's growth, become threatening, resulting in more and more withdrawals from society. As a psychological (or psychiatric, social welfare, or educational) response to this, individualized treatment is chosen at first, but gradually group work is combined to promote development. In fact, groups such as day care program, adjustment guidance classes, etc. are practiced, but there are no systematized principles shared about the children's development promoting or therapeutic mechanisms. In fact, the most systematized and refined technique is group therapy for children and adolescents. And in fact, ICU Graduate Program in Clinical Psychology Program has been associated with Dr. Saul Scheidlinger, a great authority on children and adolescents group therapy in the U.S since the 1990s. Various groups had been practiced, and pioneering research was being conducted both domestically and internationally when the Graduate Program in Clinical Psychology was active. Mr. Kimura is the last student in the ICU's history of training program for group therapist.

He had been involved in and managed the groups in the present study as a therapist, and has grown up with the groups and the children through his research and practice. In the course of his own growth as a professional, he has published a number of research papers, and some of them have been written as practice reports. The present study is an attempt to approach the issue of affect regulation of children and adolescents, which has become a major issue in recent years, using the theory and method of mentalizing, which is considered to be particularly useful.

The mentalizing approach pays attention to the essence of emotional exchange in attachment relationship at each moment, which makes the practitioner feel the relationship with the child more vividly, and it is natural to take the form of a case study to discuss it as research. In the present study, Studies 1, 2, and 3 presented by Mr. Kimura discuss the changes that occurred as a result of this approach over a period of one to several years. It can be said that they are valuable studies with case and material value and novelty. On the other hand, it has some weakness of not being able to fully answer the question of what kind of changes can be said to have been brought about by

this approach. Therefore, he conducted a detailed analysis of the data in Study 3 so that he tried to capture the impact of the method on the children's changes as clearly as possible by narrowing down the variables. By clearly presenting the assessment of affect regulation difficulties, examples of interventions, and the changes in affect regulation, the discussion became much clearer. With active and persistent mentalizing on the part of the therapist, the child became more in touch with affects that he was not initially able to handle on his own. This can lead to a more adaptive approach to affect regulation.

The trouble for caregivers, educators, and supporters of children and adolescents with psychological problems is that they are unable to communicate the difficulties they are facing through words or other means, and express them in destructive ways. In order to resolve this situation, it is necessary to pay attention to mental state behind their behaviors. By doing so, they can find new clues to their own problems. Then, communication among peers can be deepened, based on their authentic self. It is hoped that this discovery will provide a solution to contemporary problems, not only in the "clinical" field of children with so-called problematic or pathological behaviors, but also by spreading widely to the places where children grow up and to their families. In this sense, Mr. Kimura's research should be valued his further activities in research and practice is anticipated.